アレグザンダー・ゲルシェンクロンのヨーロッパ工業化論

竹　内　幹　敏

1

経済史の研究には，これまで2つの相異なる，そして時には相対立するアプロウチが存在してきた。その1つは，歴史家または法制史家としての訓練を基礎にして，歴史の経済的側面を研究する方法であり，いま1つは，経済学上の概念とモデルの観点から経済発展を理解する方法である。前者の方法が，歴史学と法制史学の精ちな史料操作を経済史へ適用することによって，貴重な業績をのこしてきたことはいうまでもない。これにたいして後者の方法をとる経済史家は，ドイツ歴史学派やマルクス主義の影響下にある人々をのぞくときわめて少数である。本稿でとりあげるアレグザンダー・ゲルシェンクロンの『歴史からみた経済的後進性』[1] は，この後者の方法をとる経済史研究として，現代経済史学のもっとも秀れた業績とみなすことができる。

ゲルシェンクロンはその独創的な思索と該博な知識と，たえまない研さんによって知られるアメリカの経済史家である。本書には著者の過去 10 年にわたる論文 14 編，すなわち 19 世紀ヨーロッパ経済史をあつかった論文8編と，ソビエト経済・社会の諸問題を論じた6編とが収められている。本書で論じられた多彩な問題について，いちいちその内容を紹介することはとうていできない。ましてこれらの論文のひとつひとつに適切な批評を下すことは，筆者の能力をはるかに超える。したがって本稿の目的も，本書の主要部分を成す2つの問題，すなわち工業化の「前提条件」(prerequisites) の問題と，工業化過程における「代替の型」(patterns of substitution) の問題とをとりあげて，経済史研究に重要とおもわれる若干の論点を指摘することに限定せざるをえない。

まず著者の方法論的立場について若干の前書が必要である。著者はかつてエリー・ヘックシャーの業績を論じて[2]，その経済史研究における理論の応用と統計の利用に注意を喚起したことがあったが，この点で，著者は疑いもなく，ヘックシャーの良き後継者である。第1に，本書で用いられた基礎的概念は，経済史の研究に操作性をもつように適切な再規定をあたえられている。この点は重要である。理論と歴史との関係は，一般に考えられているほど直接的なものではなく，それを用いれば，歴史における経済的問題をたちどころに解決できるというようなレディ・メードな理論はありえないからである。本書から学ぶ1つの方法論的問題は，経済史研究において操作可能な概念が，現代経済学の成果からどのように構成され得るかという点であろう。第2に，統計の利用にかんして著者が重視しているものは，信頼できる統計が得られるかどうかということよりも，研究すべき問題について，有意義な統計を計算できるだけの資料があるかどうかという点である。経済史の研究に独自な観点から，概念の計測性と統計の作成過程にたいして慎重な検討をくわえることが，著者の方法論的立場である。ソ連工業生産のドル指数にかんする研究，国民所得データーにたいする批判，イタリアとブルガリアの工業生産についての独自の計算は，著者のこの立場から結実した研究にほかならない。本書をこれまでの経済史研究から区別しているものは，以上の2点を基礎とした著者の独創的な問題の提起とそれへの解答である。

2

本書における著者の分析視点は，ヨーロッパ工業化過程の特殊性を工業化前夜における各国の相対的後進度と関連させることによって，イギリス工業化の型とことなるヨーロッパ工業化の型をつかむことである。いいかえれば，この試みは，イギリスの経済発展を基準として，ヨーロッパ工業化過程にみとめられるそれからの偏差を

1) Alexander Gerschenkron, *Economic Backwardness in Historical Perspective: A Book of Essays.* Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1962, pp. 456.

2) Eli F. Heckscher, *An Economic History of Sweden.* Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1954, "Eli Heckscher" by Alexander Gerschenkron.

体系化したものにほかならない。このばあい著者にとって重要な問題は，イギリス的前提条件のないかぎり工業化は開始されないということではなくて，イギリス的前提条件の欠如にもかかわらず工業化が開始された理由を，欠如せる前提条件に代位する要因の創造という観点からあきらかにすることであった。この意味で本書は，発展法則の必然性を前提とする段階理論にたいするものとして，「代替の型」(patterns of substitution) という概念を用いながら，工業化の形態学をめざした試みとして理解することができる。

著者は『資本論』1巻24章におけるマルクスの原始的蓄積論をとりあげ，「前提条件」概念の妥当性を検討する[3]。周知のようにマルクスの原始的蓄積論は，産業資本の原始的形成の基礎条件，すなわち貨幣資本と賃銀労働者の創出と結合を説明する理論である。しかし著者が関心を寄せているものは，貨幣資本の先行的蓄積という意味での原始蓄積であって，貨幣資本と賃銀労働者の創出と結合をもたらす経済過程，すなわち農民層の分解の問題は考察から除外される。一度このように問題が設定されると，著者によって理解されたマルクスの原始的蓄積概念は，きわめて欠陥の多いものにならざるをえない。第1に，この概念は，16 世紀以降の貨幣資本の蝸牛的蓄積を意味する包括的な概念として，その歴史的意義を失うし，仮にこの概念の適用期間を短かくしたところで，なお貨幣資本の先行的蓄積が，工業投資に利用されるという保証はなにもない (pp. 38–40)。第2に長期間にわたる貨幣資本の先行的蓄積は，イギリスに存在したとしても，他のヨーロッパ諸国には存在しない (pp. 45–46)。かくて原始的蓄積概念のうちには，工業化前夜の時期にかんしてイギリスとことなるヨーロッパ諸国の特徴をあきらかにするという，発見的価値しかのこされないのである。

著者によって規定された原始蓄積概念が，著者の指摘するような難点をもっていることはたしかであろう。しかし著者はこのばあい，マルクスの原始的蓄積論から示唆を得て，それを有効な分析道具として再構成したのではなくて，マルクスの原始蓄積概念を，論破しやすいぜい弱な概念として再構成している。著者が批判したソビエト歴史学界の理論的混乱 (pp. 100–106) も，著者の解釈を生んだ1つの原因であろう。にもかかわらずこれはマルクス主義的概念のフェアなとりあつかいではない。日本における経済史研究の現状から見るかぎり，まずなによりも原始的蓄積の経済過程，すなわち農民層の分解，あるいは歴史具体的には中産的生産者の分解を基礎とする国内市場の形成過程がとりあげられ，それについで経済外的暴力によるさまざまな形態での貨幣財産の取得，あるいは賃労働の創出が論じられるべきであったろう。

『資本論』24 章にかんする著者の解釈の不備を指摘することはそう困難ではない。重要なことは，著者があらゆる国あらゆる時点に妥当する前提条件の存在を否定することによって，工業化のオパレーターによって創設される代替要因の重要性を強調しようとした点にある。イタリアの有能な歴史家ロサリオ・ロメオの原始蓄積論を批判した論文[4] は，著者の議論の特徴をしめして興味深い。

ロサリオ・ロメオのモデルでは，まずリソルヂメント以後およそ 20 年間における農業生産の急速な発展が強調される。そして高い1人当り農業生産性と農業人口1人当りの低い消費水準との差は地代の増加となり，そこから鉄道建設に必要な資本が，自発的貯蓄と課税をつうじて供給されるのである。かくてロメオのいう原始的蓄積は，80 年代における工業生産の発展に先行したという意味で原始的であるとともに，農業からの資金は直接工業投資に利用されず，サービス部門の創設に利用されたという意味でも原始的である (pp. 106–108)。ゲルシェンクロンの批判は，まずリソルヂメント以後 20 年間におけるイタリア経済の発展が，ロメオによって指摘されるほどめざましいものではなかったという事実にむけられる。ロメオ的原始蓄積が欠如しているならば工業化への躍進は，他の代替要因が創設されぬかぎり延期されるであろう。そして実際に，1880 年代の工業発展は，近代的投資銀行の未確立のため流産せざるをえなかった，と著者は指摘している (pp. 110–116)。

なるほど，イタリアにおける事情はそうであったかも知れない。しかし問題なのは，著者の議論が，イギリス的原始蓄積かその欠如かという二者択一として展開された結果，工業化に先行する一定期間におけるヨーロッパ経済の型把握は，考察のそとに置かれるという点にある。著者は「相対的後進度」(relative degree of economic backwardness) の概念をしめしているけれども，それは資料の利用可能性と指数問題における困難のゆえに計測可能性のない概念であって，生産水準，技術水準，住民の熟練，教育程度，廉直な資質，企業家のタイム・ホライズンなどの包括的印象的な判断にもとづいている (pp. 42–44)。そのかぎりで，この概念に実質的内容は

3) "Reflections on the Concept of 'Prerquisites' of Modern Industrialization."

4) "Rosario Romeo and the Original Accumulation of Capital."

ほとんどない。「相対的後進度」が著者のモデル構成の出発点であるならば，工業化前夜におけるヨーロッパ経済の型把握が可能となるような命題が提出されるべきであったろう。「代替の型」にかんする著者のユニークな見解は，これによって損われることはない。そしてロサリオ・ロメオの原始蓄積論がイタリア経済について妥当性を欠くとしても，それは工業化以前におけるヨーロッパ経済の型把握を研究するうえで有効な分析道具を提供しているとおもわれる。

3

本書の第1，第6，第7論文では，ヨーロッパ——フランス，ドイツ，ロシア——工業化の型にかんするいわゆる「ゲルシェンクロン・モデル」[5]が提出される。著者のモデル構成は，イギリス的前提条件を欠くこれら後進諸国の工業化過程で，工業化のオパレーターによって発見され創造された代替要因の体系化という観点からなされている。

「ゲルシェンクロン・モデル」については，すでに中川教授によるくわしい紹介があるので[6]，ここではその大要を要約するにとどめる。

1. 工業化直前における後進国の状態は，経済的後進性という現実と，工業化に内在する可能性とのあいだの緊張状態である。工業化の延期は，先進国におけるより高度の技術を導入する機会の増加を意味するから，相対的後進度の増大にともなって，この緊張は増加する。工業化の可能な利益が現実の阻止要因をじゅうぶんに相殺する段階に達したとき，後進国の工業化が開始される。

2. 相対的後進度の増大するにつれて，当該国の工業化は，工業生産の高い成長率という意味でのビッグ・スパート(big spurt)として開始される可能性が大きくなった。成長率におけるこの非連続は，先進国より借りる技術の労働節約的革新によって保証される。

3. 相対的後進度の増大にともなって，大規模な設備・企業の利益と，「バランスのとれた成長」に内在する利益がよりじゅうぶんに利用された。後者の利益は多数の工業部門の同時的発展，とりわけ消費財にたいする生産財のより急速な発展に関連する。

4. 相対的後進前の増大にともなって，工業部門への資本供給と工業生産にたいする需要の維持・拡張を目的とした，特殊な制度的要因の役割はより大きかった。このことは，相対的後進度の増大にともなって，消費を一時的に抑制し，投資の増大をはかる傾向が大きかったことを意味する。

5. 後進国の工業化過程では，停滞と因習を打破するために，そしてまた物質的犠牲と伝統的価値や信念の損失をふくむ政策に民衆の支持を結集するために，強力なイデオロギーが必要とされる。フランスにおけるサン・シモニズムとドイツにおける経済的国民主義の役割，さらに 90 年代のロシアにおけるマルクシズムの魅力はこの観点から理解される。

以上の命題には，一定の時間的・空間的制約がある。まず時間的制約からいえば，ゲルシェンクロン・モデルは工業化のビッグ・スパートの時期，いいかえれば，工業生産の成長カーブにおけるキンクという意味での「産業革命」のモデルにほかならない。この点は第4命題に関連して，後進性の漸進的変化にかんする著者の議論からあきらかである。著者は特殊な制度的要因の例として，ナポレオン3世下のフランスにおける投資銀行(crédit mobilier)，ドイツにおけるイギリス的商業銀行とクレディ・モビリエ的投資銀行との結合，そしてより後進的なロシアにおける 1890 年代の財政政策をあげる。しかし工業化の進行とともに，ドイツにおける銀行の工業企業にたいする優位は変化し，両者の関係は対等な協調，または逆転した関係になる。同じくロシアにおける国家の役割も後退し，残された間隙はドイツ型銀行による企業指導によって埋められる(pp. 11–22, 125–6 and 134–6)。

第2に，空間的制約について。著者のモデルは，「借りられた技術」(borrowed technology)の革新効果の利用という意味での「後進性の利益」(advantages of backwardness)について適用され，「後進性の不利益」(disadvantages of backwardness)がいちじるしく累積する場合には一定の制約がある。イタリアとブルガリアの経済発展をあつかったユニークな2編では[7]，両国におけるビッグ・スパートの流産あるいは欠如の原因が，イタリアにおける投資銀行の未発達，ブルガリアにおける国家の政策の不適切という側面からあきらかにされ，別の観点からするモデル作成の必要が示唆されている。

---

5) "Economic Backwardness in Historical Perspective"; "Russia: Patterns and Problems of Economic Development, 1861–1958"; "Economic Development in Russian Intellectual History of the Nineteenth Century. *Annex*: Realism and Utopia in Russian Economic Thought, A Review."

6) 中川敬一郎「後進国の工業化過程における企業者活動」『経済学論集』第28巻第3号　1962・11.

7) "Notes on the Rate of Industrial Growth in Italy, 1881–1913"; "Some Aspects of Industrialization in Bulgaria, 1878–1939."

ここで若干の問題を指摘するのが順序であろう。

第1に著者によって規定された連続・非連続概念は，産業革命研究史にあたらしい問題を提起する。イギリス産業革命史をめぐる悲観説と楽観説の対立についていくぶんの知識をもつ人にとって，成長曲線におけるキンクの意味での非連続概念が独自の意義をもつことはあきらかであろう。

ところで重要なことは，著者の非連続概念がもっぱら工業生産の速度に関連させられているという点である。ここには2つの問題がある。その1つは，現在利用しうる国民所得データーは，きわめて不満足な価格指数にもとづくものであるから，経済史の研究に利用するには適切でないという論点である(pp. 436–444)。いま1つは著者の見解によれば，ビッグ・スパートは農業生産のいちじるしい発展なしに可能とされるから，工業生産の極度な加速さえも，当該期間における国民所得——農業所得がその大部分を構成する——の成長率におおきな影響をあたえぬとする論点である(pp. 353–4)。これはおそらく議論の余地の多い見解にちがいない。国民所得のデフレーターにかんする論論はしばらく措くとしても，著者のように工業生産の成長率に特別の注意をむける立場と，クズネッツのように，近代的経済成長をGNPまたは1人当りGNPの持続的成長と規定する立場とのあいだには若干の相異がある。ゲルシェンクロンのように，農業と工業との極端に不調和な発展に着目するほうが妥当かどうかという問題に答えるためには，工業化の分析視点と経験的データーについて注意深い検討を必要とする。

第2に，ビッグ・スパートを産業構造のシフトと最新技術の導入に密接に関連させた点でも，本書は産業革命研究史に1つの問題を提供する。この2つの要因は，著者のモデルにとって欠くことはできない。というのは本書で強調されている「後進性の利益」は，技術進歩がもっとも急速であった部門，すなわち19世紀後半の経済史においてはおもに生産財部門の促進によってよりじゅうぶんに享受されるからである。

ビッグ・スパートの時期に後進国が先進国から採用する技術の水準と型をあきらかにした点での著者の貢献は，いうまでもなく大きい。しかし著者が論じなかった問題は，先進国から輸入される最新技術と後進国に在来的な伝統技術との競争的，あるいは補完的な関係の問題であり，さらに「借りてきた技術」が消費財部門よりも生産財部門において優先する理由の説得的な提示であろう。さらにまた最新技術の導入は，良質・適格な工業労働者の極端な不足に効果的に代替するという著者の見解が，ロシアをのぞく他のヨーロッパ諸国についてどの程度妥当するかは，おなじくたちいった検討を必要とする問題である。ハバククの近著『19世紀におけるアメリカとイギリスの技術』[8]が，技術変化——それは資本集約的機械化と等置される——を生産要素結合比率の観点から説明するといういくぶん混乱した議論を展開しただけに，いまのべた諸問題について考察をすすめることはさらに有意義であろう。

以上の問題点は，著者のモデルの妥当性に疑問をはさむためではなくて，その意義をよりあきらかにするために指摘された。全体として見れば，欠如した前提条件に代位する要因が，どのように工業化のオパレーターによって発見され創造されたかという側面を強調した著者のモデルは，ヨーロッパ工業化の理解に貴重な貢献をしたといわなければならない。著者のいう「代替の型」概念は，近代経済史の研究にたずさわる人々にとって，有効適切な分析道具を提供するものである。

4

本書は近代ヨーロッパ経済史の研究者にとって必読の書であるだけでなく．日本経済史の研究者も本書から数々の示唆を得ることができるであろう。「ゲルシェンクロン・モデル」を基準とする日本経済史の研究は，すでにヘンリー・ロゾフスキーのすぐれた研究[9]によっておこなわれた。しかし本書を直接ひもどくことは，日本の工業化の研究のために適切な概念とモデルの構成の必要を感じつつある歴史家にとって，いぜんとして有益である。そしてもし著者のモデルを発展させて外国貿易をふくむ開放モデルとして再構成することができるならば，殖産興業政策の研究にかんして最近強調された[10]課題，すなわち金融・財政・貿易の統一的把握という課題を解決するための有効な分析視点があたえられるであろう。

近代工業化研究の視点と方法について，私は本書から多くのものをまなんだ。そして本書のように独創的な研究にたいしては，その模倣ではなくて，その検討をつうじて独自の分析視点と方法を用意することの必要性を強く感じる。

---

8) H. J. Habakkuk, *American and British Technology in the Nineteenth Century*. Cambridge University Press, 1962.

9) Henry Rosovsky, *Capital Formation in Japan*. New York : The Free Press of Glencoe, 1961.

10) 原田三喜雄「殖産興業政策研究の当面する課題」『社会経済史学』29巻1号　1963・1.